

川上から川下における好循環とは —楠デッキハウス建設を通じて—

森と木のクリエイター科 木造建築専攻 田村 聡

1. 研究背景と目的

自分は森林文化アカデミーに入学する前は森林組合で働いていた。丸太を扱うことがあってもその丸太がどのように加工されてどのように使われていくのかについては仕事の中で知ることがなかった。林業を行う中で林業のその先を知ることが重要だと感じ、また伐採した木を自分でも使いたいということを考えるようになった。そのことがきっかけとなりアカデミーに入学した。アカデミーでは森林における川上から川下までの流れを学ぶ機会が多くあった。学んでいく中で川上、川中、川下の繋がり的重要性を学んだ。しかしその繋がり断片的であることが多い。どうすればそんな現状を好転することができるのかと思い本研究に取り組むことにした。

2. 目的

本研究の目的は自分が関わることでできた川上から川下が見える設計案件をもとに川上から川下の好循環になるための要素とは何かを考察する。

3. 研究の流れ

今回自分が設計で関わることでできた川辺町の「楠デッキハウスプロジェクト」は川上から川下までがはっきりと見える計画である。実践を通じた調査により調査をする第三者目線だけでなく、プロジェクトに関わる川上から川下的一端としても研究を進めていく。

4. 実践調査

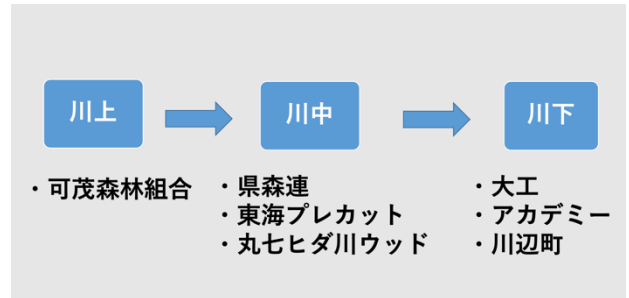
①楠デッキハウスの条件整理～楠デッキハウスとは

川辺町では以前から登山道整備などをして町、地域の活性化を里山整備と結びつけて町づくりを行なっている。楠デッキハウスはその中の計画の一部である。そのため今回の建築で使う材は既に間伐されて搬出済みとなっていた。

川辺町にある山楠公園の楠を守るということから本プロジェクトは始まっており、楠を守りながら楠をシンボルツリーとしてさらに強調できるような建築にしたいというのが主な要旨であった。

プロジェクトの関係相関図としては可茂森林組合を経由して県森連、東濃ヒノキの大工という流れになっている。アカデミーは可茂森林と大工の両方から相談があり、可茂森林からは楠を守りながら活かす建物が欲しいという内容、大工からは設計をアカデミーに担当してもらい「一緒に良いものを創りたい」という内容だった。それを踏まえアカデミーは大工の設計協力として参加することとなった。

楠デッキハウスの川上から川下



楠デッキハウス相関図



②設計から施工までの流れ

基本設計を川辺町に提案したところぜひ実現したいということになり、協力設計をアカデミーが引き続き受けることになる。協力設計を進めるうちに

- ・当初の製材予定より遅れる
- ・当初の予算を超える
- ・手間のかかる特殊な納まり
- ・確認申請が必要になる

などの問題が出てきた。そんな問題に対してそれぞれの関係者が協力体制をとって格段の対処してくれた。

- ・川辺町；予算の増額確保
- ・可茂森林組合；確認申請代その他予算の提供
- ・県森連；施工日程の調整等
- ・大工；図面を実現するための各種段取り

精度の高い加工

- ・丸七ヒダ川ウッド；製材、乾燥の延期、原木保管
- ・東海プレカット；特殊加工を含めた加工絵を引き受ける

その結果、無事に着工を迎えることができた。

③ヒアリング

②で起こった川上から川下の分野を超えた協力体制は何が根本的にあるのかを検証するためヒアリングを行った。その結果、それぞれどういう思いを持って今回の計画に参加しているのかを把握することができた。

川辺町

- ・人口が減少しているなか子供、子育て世代に利用されて町が活気づく拠点として今回の計画、建物は是非とも実現させたかったから
- ・間伐して山の整備をしつつその木をしっかりと町の中で活かす地産地消になっている流れが良い

可茂森林組合

- ・川上側からも良いものを作ることに貢献して若い世代も住み良い街づくりの一端を担っていきたいため。
- ・また地域の住民だけでなく木育イベント、企業の福利厚生の場としても使っていきたいと考えている

県森連

- ・可茂森林組合がやっていることを応援したい
- ・この楠デッキハウス建設は山の再生と利用の良い循環例を目指せる
- ・公共工事であり連携があってこそだと思うのでその役割をしっかりと果たしたい

大工

- ・どうせつくるなら良いもの、面白いものにしたい
- ・頑張って設計をしてもらったので、もうけ度外視でもその図面を実現させてやりたい
- ・色々な人に関わり仕事ができるのが楽しく、みんなで協力して良いものに作り上げていく仕事が好きだから

このヒアリングからそれぞれこの建築に関わる思いを把握することができた。共通していることは自分のためだけでなく、他人のためにもそれぞれ頑張っていた。

④ハブ的役割

また今回楠デッキハウスで注目したいのがハブ的人材の強みである。森林から建築までの人の関わりを見るとハブ的役割をする人が川上から川下のくくりを超えて建築までの流れを円滑にしていた。

ハブ的役割①可茂森林組合

可茂森林組合は川下でありクライアントでもある川辺町基盤整備課と繋がっており全体の計画を練り、また川上の山主、川中の製材所、川下の大工、アカデミーとも繋がりがあった。全体構想のなかで森林から活用構想までの流れを作っている。

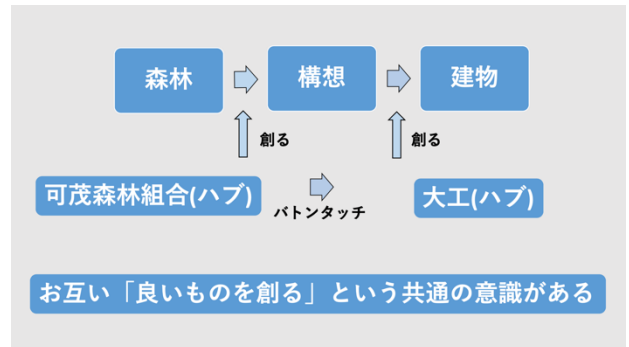
ハブ的役割②大工

今回建物を施工するにあたり東濃檜製品流通共同組合の大工もハブ的役割を担っていた。川上の可茂森林組合、川中の製材所、プレカット、川下のアカデミー

と繋がりがあり建物の実現において重要な役割をしていた。

またハブ同士の繋がりが、「良いものを創る」という共通意識があることも実現までの道りを円滑にしていたと考えられる。

森林から建物に対するハブ同士の繋がりと役割



5. 考察

現在川上から川下の繋がりにおいては木材流通を明確にするシステムイノベーションなど仕組みづくりに力を入れることが多いが、今回は関係人口を増やすことで結果的に良い協力体制が構築された。その協力体制の中では人のために良いものを創るという抽象的だが確かに繋がっているものがあつた。この繋がりをつなげ続けることが川上から川下における好循環の要素だと考えた。

またハブ的人材が川上から川下の流れの中で一方通行でない動きをすることで、仕事の流れを円滑にすることは、アナログであるが重要な調節機能であった。今後ハブ的人材を育成することが川上から川下における一つの好循環を生むことができる要素だと今回のプロジェクトから感じた。またそういったハブ的人材になるには周囲との信頼関係があつてこそであり、それをどう築きあげるかもポイントである。

また今回川上と川下が最初から繋がっていてさらに川上から川下までの物語ができていて、建物として材が使われる時には関係者の思いが付加されていた。このことは好循環を生む一つの要素ではないかと思う。

6. 終わりに

今回設計として自分は楠デッキハウスに関わることができたことはアカデミー入学前に疑問であった「丸太がどのように使われるのか」という疑問をまさに解決する貴重な体験であった。自分もハブ的役割を意識しつつ今回のプロジェクトから学んだことをこれから先しっかりと活かしていきたい。設計後にプロジェクトを振り返ると様々な人の思いが詰まった計画だと実感できた。設計は人の思いを形につなぐ重要な仕事だと感じた。